

第七部類 臺灣附近の地震

本部類に屬する地震は臺灣附近に發したるものにして本年中に三回を觀測せり而して震動時間の最も長かりしは一時四分八秒に達し短かしは二十六分三十七秒なり初期微動の平均振動期は五、〇秒内外にして主要動は稍々緩となり一六、一秒乃至四、五秒の間にあり今本部類に屬する地震を擧ぐれば左の如し

四月十五日午前四時五十七分二十四秒臺灣北部の地震

此地震は臺灣島の北部に發したる強震にして震域南方は恒春に北東方は奄美大島に達し震域の直徑四百五十里にして陸地面積二千四百五十方里に達せり、就中強烈震部は臺北附近八十方里の地にして強震部は臺中以北七百五十方

里なり而して此地震は大阪にては人身に感覺なく普通地震計にも亦た感せざりしか地動計は明かに振動を描出せり今其概況を記すれば第一初期微動の平均振動期は五・〇秒にして二分零秒時間繼續し第一は平均振動期五・〇秒にして一分十六秒時間繼續し主要動に移り二十四分十秒時間は最も著しく最大振幅は第二部に於て〇、三一耗、振動期七、四秒を現し爾後漸次振幅縮小し終期の微動となり二十五分三十二秒時を経て靜止せり、全振動時間は五十二分五十八秒なり即ち左表の如し

東西動地動計觀測

震動	繼續時間	平均振動期	最大振幅	其振動期
初期微動	三分一六秒	五・〇秒	〇・一〇	五・九秒
第一	二・〇〇	五・〇	〇・〇五	五・九
第二	一・一六	五・〇	〇・一〇	五・四
第三	二・三五	五・三	〇・三二	一・一
第四	二・二七	五・三	〇・三二	七・四
第五	三・四八	五・三	〇・一六	六・〇
第六	三・四八	五・五	〇・〇七	五・九
第七	三・五八	六・一	〇・〇五	六・一
第八	四・〇五	六・一	〇・〇三	六・二
終期微動	二九・二〇	—	—	—
全振動時間	五五・二一	—	—	—

震動	繼續時間	平均振動期	最大振幅	其振動期
初期微動	三分一六秒	五・〇秒	〇・〇七	五・一
第一	二・〇〇	五・〇	〇・〇七	五・一
第二	一・一六	五・三	〇・二〇	五・五
第三	二・二三	五・四	〇・三〇	八・七
第四	三・五九	五・四	〇・三二	七・四
第五	四・一七	五・六	〇・一八	七・四
第六	四・一三	五・六	〇・一〇	七・〇
第七	四・三八	六・〇	〇・〇五	七・〇
第八	四・三〇	六・〇	〇・〇三	七・〇
終期微動	二五・三二	—	—	—
全振動時間	五二・五八	—	—	—

南北動地動計觀測

此地震は稍々大なるものにして各地の觀測に依り震波の傳達したる區域を調査するに西方は歐亞大陸を経て大西洋に達し南西方は亞弗利加南端なる喜望峯に南方は濠洲「シドニー」に南東方は太平洋を越えて遠く南米「コルドバ」に

達したり

今各地の観測を列記すれば左の如し

観測所	發震時	観測所	發震時	観測所	發震時	観測所	發震時
カ ル カ ツ タ	二〇〇〇・一	臺 北	一九五四・一	シ ド ニ	二〇二二・九	シ カ ウ エ	一九五五・八
ベ イ ル ト	二〇〇四・〇	マ ニ ラ	一九五六・五	ホ ノ ル	二〇二五・四	大 阪	一九五七・四
カ イ ロ	二〇〇五・七	パ タ ビ ヤ	二〇〇〇・四	コ ル ド バ	二〇二四・四	東 京	一九五七・二
シ エ イ ト	二〇〇二・〇	コ ダイ カ ナル	二〇〇一・八			水 澤	一九五八・八
エ ヅ ン パ ラ	二〇〇六・五	ホ ン ベ イ	二〇〇二・五				
ペ ー ス レ イ	一九四七・〇	喜 望 峯	二〇二七・〇				
サ ン フ ェ ル ナ ン ド	二〇一八・五						

此地震に關し臺北測候所より精密なる調査報告ありたれば其概要を左に抄記すへし

本年四月十五日拂曉本島北部に強震あり死者九名負傷者二十三名全潰若しくは半潰家屋三百七十余を數へ北部に於ては實に領臺以來の大震とす元來北部地方は地震比較的頻繁なるも人体に感覺あるもの平均一年十回位にして戶外に飛び出す程の地震は甚た稀なり而して領臺以來最も強かりしは明治三十四年六月七日午前八時過ぎに起りし地震にして當時基隆宜蘭臺北の各廳下に多少の被害ありしも負傷者は唯一人ありしのみなり今回の地震に付き迷信深き本島人は忽ち流言蜚語を傳へ引續き大地震來るとて山中又は淡水河に舟を浮へ避難せしものありしと云ふ地震計観測 左に今回の強震に關する観測の結果を述へんに各測候所普通地震計の観測は左の如し

發 震 時 震 動 時 間 方 向 震 度 記 事

臺北	前三時五四分四秒	三分〇〇秒	南東―北西	強	1
社寮島	前三時五三分一六秒	一分三八秒	南東―北西	強	1
臺中	前三時五五分四秒	1	南々西―北々東	弱(強き方)	液体溢出す
臺南	前三時五五分三五秒	三分五二秒	南東―北西	弱(弱き方)	家屋動揺す
澎湖島	前三時五四分一七秒	四分二四秒	北西―南東	弱(弱き方)	家屋動揺す
臺東	前三時五五分六秒	1	1	微	戸障子鳴る
恒春	前三時五五分四五秒	1	南―北	微	人体に感す

臺北の地震計は始め稍々急なる微動に起り七、八秒の後急に振幅を増大し發震時より九、四秒にして南東より北西に向て全週期一、二一秒に四四、〇耗(曲尺一寸四分五厘)の最大水平動を示し初震より四十七秒間は震動著明にして其れより漸次微小となり總振動時間約三分にして靜止す上下動も性急なる震動に始まり約十秒の後急に振幅を増大すると同時に描針記象紙外に逸出す

基隆社寮島の地震計は稍々急なる微動に始まり六、〇秒の後振幅を増大し發震時より七、七秒にして南東より北西に向ひ著大なる波動を示し爲めに東西動は描針記象紙外に逸出し以下十五秒間の記象を欠く南北動は南より北に向ひ一、二秒時に二、〇耗(曲尺六分九厘)の最大振幅を示す著明なる震動は初震より約四十秒間繼續し總震動時間一分四十秒にして靜止す上下動は發震と同時に描針記象紙外に逸出し詳細を知る能はず

全所強震計は發震より二、七秒の後急に振幅を増大し初震より四、二秒にして南東より北西に向ひ全週期一、三四秒に六一、〇耗(曲尺二寸〇一厘)の最大水平動を示し震動の始めより二十五秒間は震動著明なり、上下動は微小なる波動にして初震より四、一秒の後〇、七秒に一、五耗(曲尺五厘)を最大振幅とす

臺南の地震計は發震時より三十五秒を経て一、三秒に付き最大振幅五耗五(曲尺一分八厘)を示し爾後約一分間は顯

著にして震動時間長し澎湖島の地震計は發震時より約二十五秒を経て上下水平動とも最大振幅に達し水平動は之より十六秒を経て再び稍著大となりしも爾後漸次靜止せり

地動計觀測 次に各所の大森式地動計觀測の結果を擧ぐれば左の如し

	臺 中	臺 南	澎 湖 島	臺 東	恒 春
初期微動時間	一五秒七	三一秒四	二六秒〇	三〇秒〇	三五秒六
主要動時間	一分四〇秒	一〇分一秒	一分四一秒	一分四七秒	六分三四秒
同平均週期	1	七秒八	三秒九	1	二秒五
最大振幅	二五耗〇	七耗九	四耗五	四耗七	四耗三
同週期	九秒八	六秒五	四秒〇	一秒八	1
終期微動時間	二九分四六秒	四八分三五秒	一六分一八秒	五六分三九秒	三〇分〇五秒

各地の地震計は孰れも其裝置東西動を示すものとす、而して今回の地震に初期微動より主要動に移る時其示針は始め西に跳ねること各所皆全一なり臺北は發震後直ちに示針逸出し記象する能はさりし

被害 總督府警察本署の調査に依れば今回の強震に付き被害最も多かりしは臺北廳枋橋支廳下にして住家の倒潰四十八戸半潰百五十六戸大破十五戸破損二百十九戸の多數に及びたるも人の死傷は本島人輕傷六名ありしに過ぎず
 家屋の被害比較的多かりしに比し負傷者等の少かりしは被害區域の住民は農家多く目下田草取りの時期にして何れも晨起し居りたるに因ると云ふ又破壊住家の多くは二十年若くは三十年以前に建造したる土塙造なり罹災民中飲食物を給與したる者は至て少く同支廳下に於ては二十五名ありしも四月十五日より二十一日に至る迄給與せしに過ぎずして罹災民も略は跡片附を了り夫々平常の業務に復せり其他各廳下の被害は左表の如し

人畜死傷表

臺北廳	基隆廳	宜蘭廳	深坑廳	桃園廳	新竹廳	死		重傷		輕傷		傷合計		家畜死
						男	女	男	女	男	女	男	女	
二	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
七	一	四	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
九	一	四	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	一	一
二六	一	六	三	一	三	一	一	二	一	一	一	一	一	一
三二	一	九	一	一	二	一	一	二	一	一	一	一	一	一
四八	一	一五	四	一	五	一	一	二	一	一	一	一	一	一
二八	一	六	四	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三三	一	一〇	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五一	一	一六	五	一	六	一	一	二	一	一	一	一	一	一
五	一	一	五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

右死傷者中には地震の際周章狼狽し二階より落下し負傷せしものあり又最も無慘なるは桃園廳下海山堡圳岸庄(樹林停車場より約五丁)にて崩壊家屋三戸死者四名負傷者六名あり其一戸は老母に養女及孫女の三人暮しなりしか熟睡中家屋崩壊し上砌に壓せられしものと見へ三名とも其儘窒息し壓死せりと云ふ

家屋被害表

臺北廳	基隆廳	宜蘭廳	深坑廳	桃園廳	新竹廳	燒	失全	潰半	潰大	破	破	損	計
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六九	九	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一六七	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一八八	五〇	一	五二	四五〇	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八
三〇〇	六六	二	六一	七三九	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇

新 竹 廳	一	二	三	一	一	五
計	一	二 1111	三 2222	一 56	一 780	五 11233

右被害中無住家屋全潰十一、半潰五、大破五、破損百〇六、合計百二十七にして即ち廟祠又は明屋なり
 桃園廳下破損の内隘藜の小破四十九を含み新竹廳下被害中には蕃界分遣所全潰一、半潰一、隘藜全潰一、半潰二を
 含む